

あぶれ者の自立

「在日朝鮮人は、朝鮮人になろうとする努力なしには朝鮮人になれない。朝鮮語を知らぬ朝鮮人として出発した筆者は、自分が朝鮮人になってゆく可能性を民族の姿と重ね合せながら考えつつける。

高^{コウ}史^シ明^{ミン}

ある出版記念会での衝撃

小説「夜がとぎの歩みを暗くするとき」を發表して、四年の歳月が流れようとしている。光陰は矢の如しといわれるが、まことに歳月の流れにはめまぐるしいものがある。さまざまながことがあった。もぐらのように、ひたすら暗い穴ぐらに目を向けつつけていた者が、とつぜん表土の上に引きずりだされたのだから、当然のことであろう。

歳月は、私の手に、皮膚と肉体に、そして脳裡にその時を刻みつけた。その時が刻みつけた時の翼をめくると、そこにはさまざまなお会いがひっそりと沈んでいる。ごく限られた人しか会っていない私には、見るも

の聞くものすべてが新鮮で、珍しかった。

駅、あふれかえっている人間、くすんだ建物、街路樹……そこに人と人の繋がりを感じられ、その人と街の風景は、目に見えない何物かによって結びつけられていた。あたかも、一個の巨大な有機体のように、私は目に見える風景に、多様な色が隠されているのを発見した。また、人々がまったく同一の言語をもって喋っているにもかかわらず、それぞれ固有の喋り方をするのに驚いた。人々の喋り方、癖、氣質、声と脳細胞の繋がり方の微妙なちがいの多様さもまた、私を驚かせるものであった。多分、それが現実の世界というものなのであったのだ。私は眩しさに目を打たれ、たえまなくどきまぎししていた。その眩しい光は、

私の闇をいっそう鮮明にするものであったが、それと同時に私の知らなかった世界の所在を教えるものであったといえよう。ともあれ、私は、闇をかかえたまま、明るみに引きずりだされたのである。

ところで、このさまざまな出会いの一つとして、同じ朝鮮人との出会いがある。ある在日朝鮮人作家の本が出版されて、その出版記念会があり、私もまた招かれたのである。この招待を受けたとき、私はどんなに喜んだことであろう。私には、同じ朝鮮人の知合いがほとんどなかった。だからまた、何時か、どこかで、同じ朝鮮人にめぐり会いたいという思いは、私のうちにあっては強いものであったのである。そういう意味では、私もまた、

まぎれもない朝鮮人の一人であるといえよう。

実際、この国に生きている朝鮮人には、否定しようのないある共通の感情があるのである。一世の人たちの場合でいうなら、互いにその肉体にしみついていて朝鮮の風土や、氣候をたしかめあうだけでも喜びであろう。私のような者には、絶えまなくからみついてくるある不安が、その共通の場を形づくっているのかもしれない。たしかに、朝鮮人は、朝鮮人であるというその一点では、みな同じ条件におかれているのである。ことばをかえて

ここにもまた、さまざまな陰影としてしみついていくものである。この重い分断の傷から、だれ一人自由でないとするなら、どうして朝鮮人が共通の感情をもたないことがあるのか。

いうと、分断の重い影をその肩に背負っていない朝鮮人は、一人もいないということであろうか。それは、積極的に統一運動にかかわっている人々の肩にもかかっていけば、すでに朝鮮人でなくなっている人々の肩にさえかかっているのである。そして朝鮮人は、この分断が、朝鮮人の意志を押し潰すかたちで進行した冷戦構造の力学によってもたらされたものであることを知っている。従って、朝鮮人は、ほとんど例外なく、国際政治の動向に敏感なのである。朝鮮人のところには、この国際政治の力学によってもたらされた分断の傷が一樣に焼きついているといえるだろう。それは、朝鮮戦争を知らない世代の朝鮮人の

私は、その出版記念会の日の到来を、胸をはずませて待った。やっと、この私も同じ朝鮮人の仲間入りができるのである。私は子供のように陽気になった。いよいよその当日である。

会場には、大勢の人々がつめかけていた。そのほとんどがはじめて見る人たちばかりである。なかには、顔だけは知っている人がいたが、いずれも遠くから尊敬の念をこめて見守ったことがあったというにすぎない。この人々はしかし、みんな私に親切であった。そこには、暖かい思いやりがあったといえよう。私は、それをたしかに感じとった。だが、仲間入りができると思ったのは、私の思い上りであったのである。

それは、会がはじまり、祝辞のことは述べられはじめるやいなや、いやでも思い知らなければならぬことであった。私には、その朝鮮語で述べられる祝辞のことが、ほとんど理解できなかったのである。私は同じ朝

あぶれ者の自立

鮮人に招きを受けたことに有頂天になってしまつて、この招きを受ける資格があるかどうかの反省をおろそかにしていたのである。もし、私が朝鮮人でなかったら、このことばのことはそれほど意識しなくても済んだであろう。しかし、私は朝鮮人なのである。理解できないことばは、私のうちを刺しつづけ、それはたちまちのうちに棘の壁となつて、私の全身をとり囲んだ。祝辞を述べている人々が、非難がましいことをいったのではない。私のうちの朝鮮人が、私を非難しはじめたのである。私は顔をあげつづけていようとしたが、まっすぐ顔をあげることができなくなった。人々の顔を見ることができないのである。私は顔を伏せ、背中をまるめた。すると、祝辞のことばに、ときどき日本語が混りはじめたのである。理解できない私のために、ただそのためだけに人々は日本語を間にはさみはじめたのである。それは、すでに小さくまるまっていた私の背中を、深くぐいっとへし折ってくるように私には思われ

た。私の存在は、楽しがるべき会の空気を乱し、隙間風を吹きこむものだったのである。私はそれを感じた。

そして、こうなることをもっと早くから意識

識していなかったことが、悔まれた。私が同じ朝鮮人と出会うのは、これが初めてのことであったのである。すでに遠い過去のことであるが、この大都会で一人になってから私は、私のように朝鮮人らしからぬ朝鮮人は別として、二度、すぐれた朝鮮人たちと会う機会をもっていた。そして、このときすでに同じような棘に刺された体験をもっていたのである。約二十年前、私は浮浪者のような生活をしてきた。そしてその浮浪者のような姿の後には、目に見えない汚辱が引きずられていた。私はその汚辱から脱出しようとして、浮浪者になっていたのである。しかし、この浮浪者は、民族の矜持をもって生きている人の前にでると、全身にぶつぶつと突き刺さってくる棘を感じないではおれなかったのであった。私は顔を伏せつつげながら、それらの出会いと別れをつぎつぎに思いだしていった。出合いは、棘につつまれていながら、やはり喜びとしかいえないような喜びであり、別れは、愁しさにつまれた悲しみに刻印されている。私は喜びがあるからこそ、それらの人から離れていかざるをえなかった。なぜなら、その喜びとは、同時に棘でもあったからである。私はそれらの思いを噛みしめた。そ

していまさらのように、自分自身のあり様を思い知ったのであった。

なるほど、私はその人たちと同じ朝鮮人である。さきにも書いたように、その人たちと私とは、朝鮮人である限り同じ条件を生きているといえる。しかし、そのあり様と、かかえこんでいるものは、大きく違うのである。この発見は、暗い穴ぐらから引きずり出されたあと、私が知った大きい発見の一つといえるだろう。

この発見をうる前、私にとってきわめて大きい問題としてあったのは、日本人との関係における違和感であった。だからこそ、同じ朝鮮人と出合いたいという願望が、生きつづけていたのである。だが、この違和感とは、同じ朝鮮人との間にも介在するものだったのである。それは、私が日本人との間で感じつづけてきたものの、ちょうど裏返しのところにあつたといえるだろう。私と日本人の間には、ことばによる障壁はないといえる。従って、ここに起きる違和感とは、まさにその障壁がないというところに起きるものである。ところで、私と同じ朝鮮人との間に起きる違和感とは、同じ朝鮮人なるがゆえに、そのことばが理解できないというところに起きてくるの

である。

朝鮮人が朝鮮人になるということ
私はこの発見を前にして、立ち竦んでしまった。これは、私が朝鮮語を身につけることによって、解消されることであろうか。もちろん、その努力はつづけなければならぬだろう。その最初の出会いのときからすると、いまの私は、まだ問題にもならない程度ではあるが、少しばかりなら理解できるようになりはじめている。そして、そのことから新しい予想もなかった発見もえている。たとえば、私の朝鮮語学習はまことに頼りないものでしかないのだが、この進歩しそうでいってちつとも進歩しない学習が、私にとっては、不思議なことには朝鮮語の学習となつてかえってくるだけでなく、日本人との間にあつた違和感の解消という方向にも作用していることがたしかなのである。朝鮮語の学習をはじめると、朝鮮という存在の異質性が、はつきり自立したものになって感じられてくるということでは、日本人の間でよくいわれていることである。それになぞらえていうと、私の場合は、ちょうどその裏返しで、朝鮮語の学習が私の朝鮮人性を強める働きをして、その分だけ、

日本人との違和感を弱めているということである。

多分、そうした作用もあるだろう。そして、それはいい作用である。だが、果してそれですべてが解決されるのであろうか。私には、この問題は、もう少し複雑に入り組んでいるように思われてならないのである。

たとえば、私はよくいわれる「朝鮮人になる」ということを考える。これは私のような朝鮮人には、わかりすぎるほどよくわかることである。在日朝鮮人は、朝鮮人になろうとする努力をしない限り、朝鮮人にはなれないのである。そして私のような存在を考えると、でもなく、この努力はもっと強められていいものである。だが、この努力が、この社会における疎外感をバネにはじまり、ついにそこから抜け出すことがないまま終るとしたらどうだろう。私はこの場合の「朝鮮人になる」ということの性格を考える。そこには、むきだしの対立が生れないだろうか。この国においては、日本人、日本国、日本語ということばは、それぞれ別個に切り離すことのできない、一体のものとしてとらえるのが一般的である。朝鮮人の場合も、この国の場合と同じように、朝鮮人、(朝鮮の)国、朝鮮語というものを、それぞれその自立性を捨象し

て、一つのものとして捉えなければならぬ

のだろうか。たとえば、私は、その例の一つとして、南朝鮮に生れた大韓民国の場合を考える。ここでは、国号が大韓民国となつて以来、朝鮮語は韓国語と呼ばれ、朝鮮人は韓国人と呼ばれている。それと同じように、もし、朝鮮の大地に、高麗の名を冠した国家が誕生したとたん、朝鮮人は高麗人と呼ばれ、朝鮮語は高麗語ということになるのであろうか。

もし、そうだとすると、国家は絶対的なものとして現前する。だが、事実は逆ではなからうか。国家はしばしば変わるが、その大地に根づいた民族とそのことばはそう簡単には変わるものではないのである。それは、国家と呼ばれるもののように画一化できないものであり、その息ははるかに永く、その内容は多様なものである。私は、自分が朝鮮人になるという場合、この違いをはっきりと念頭においておきたい。いまのところはまだ、はつきりと実証できるところにまで到っていないのだが、私にはそれを念頭においておくことが、私を私に朝鮮人になる努力をつづけさせ、そしてその努力が、日本人との違和感を解消させていくように思えるのである。国家との関係を考えるときは、この違いを押えておく必要が

あるだろう。

日本との屈折した関係

私は間違っているのだろうか。きつと、間違いも含まれているだろう。私は、今日の「朝鮮」が当面している特殊事情にふれていない。だが、それについては、こうもいえるのである。私はそれを考慮したうえ、なお、そう考えざるを得ないのだと。それにしても、私のように考える者は、決して多くないだろう。こういう風になると、あたかも私のその考えは、出版記念会に集った人々と対立するところから生れたように聞えるが、決してそうではないのである。その人々は、すでに朝鮮人として自立している人々であつて、日本との違和感について、その自立性にもとづいて私などよりはるかに進んだ考えを持っていてだろう。私はただ、私の条件にもとづいて考えているのである。私の日本との関係は、一様ではない。そこには、人間のもつ感情が、幾重にも織りこまれているのである。ある意味では、日本人が抱く愛憎よりもっと深いものがあるといえるだろう。私はこの日本を切り捨てることによっては、朝鮮人になることのできない人間なのである。なんとということ

であろう。朝鮮人でありながら、日本を切り捨てることができぬとは！だが、このできないということもまた、朝鮮人のあり様の一つの形ではないだろうか。

周知のように、この国の軍国主義による朝鮮支配は、おびただしい数の朝鮮人を他国へと流出させた。多くの朝鮮人が、朝鮮以外の土地に住みついているのは、その結果である。朝鮮人は、この国ばかりでなく、中国にも、ソ連にも、またアメリカにも住みついている。流浪の不安が、わずかでも受け入れてくれる土地があったら、そこへ根づこうとする努力へ、人々をかりたてたことだろう、それが人間の生活である。そしてそこに生活が築かれるなら、人々はその土地を離れることができぬのである。これは果して悪なのであるか。日本と、中国やソ連はちがうということがよくいわれる。たしかに、ちがうだろう。日本は日本、中国は中国である。この国の役人のなかには、朝鮮人を抑圧しておいて、厄介物のように見ている者も少ないとはいえない。だが、人々は、そのような条件のなかにおいても、その生活を築きあげてきたのである。朝鮮人のこの多様性は、その統一への努力とともに認められていいのではなからうか。

私は「朝鮮」とこの国の未来を考えると、どうしてもこのことをいわずにおれないのである。

もし、これが認められてくるなら、相互の自立はそれぞれそこに多様性をつつみこんだものとして成立してくるだろう。だが、これが認められなかったら、相互の自立性は、画一化されたものとなり、そのときはきわめて厳しい状況が生れてくるにちがいない。なるほど朝鮮人のこの多様性のなかには、過去のマイナス遺産を引きずっている場合が多い。私自身の存在一つとらえてみてもそれは確認できることである。しかし、このマイナスのなかには、プラスに転化できるものがまったくないといえるかどうか。状況が厳しいものになったら、朝鮮人と日本人の間に生れた子供はどうその身を処することができるだろう。そして、そのときこの国に生きる朝鮮人の運命はどうなるだろう。それを考えると、私はどうしてもいっそう強い多様性の開花を願わざるをえないのである。

この国の人々は、約一億人であるといわれている。そうすると、ほぼ百人に一人は朝鮮人であるか、もしくは朝鮮人と密接な関係のある日本人である。その異質性のふれあいがある

多様に開花していくなら、この国の文化は、すばらしく豊かなものになるにちがいない。そして状況がそのように進行していくなら、この国に生きる朝鮮人は、その与えられた条件のなかで、それぞれの自由をのびしていくだろう。ある者は、正しい民族教育を受けて、この国と「朝鮮」との懸け橋となり、ある者は、朝鮮人になる努力をつみながら、日本人に対する歪みのない理解をひろげるであろうし、またある者はすでに日本人になっているという立場から、朝鮮への理解を深めつつ、この国を豊かにしていくであろう。そのとき、この国と「朝鮮」の関係は、真にすばらしいものになるにちがいない。人間の多様性が豊かに開花していくところでは、その独自性は光り輝くものとなり、そのような独自性にさえられたところに生れる関係は、ほんとうの意味での相互尊重となるにちがいないのである。「朝鮮」とこの国の間に、そのような関係が作りだされたら、どんなに素晴らしいだろう。

朝鮮人の多様性への一つの期待
それとも、これは見果てぬ夢というものであろうか。そうかもしれない。私の脳裡には

どす黒い不安がしみついている。朝鮮の大地から、見知らぬ土地へ流れていった親たちは、果して自から望んで流浪の旅に出たのであるか。なるほど、その昔から較べるなら、いまはまだいい。役人たちが、昔そのままの考えをもっているとしても、この国には、朝鮮人を理解してくれる人々もまた、かつてとは比較にならないほどになっているのである。

しかし、将来のことになると、だれにも確かなことはわからないのである。解放ということがいわれたとき、だれがいったいその後の同じ朝鮮人同士の戦争を予測していたことだろう。歴史の波は、朝鮮人の背骨を三度にわたって打ち砕いたのである。分断された朝鮮は、いまなお、生きた人間の肉体を捻り切るように切られて、ちぎりと離されたままである。そして、私はまったくの根なし草なのだ。首にからみついている不安は、生涯とれることがないだろう。

私は不安とともに生きている。四六時中不安を感じているわけではないとしても、私の二十四時間を本質的にささえているのはこの不安である。だが、この不安は、私の不安であるとともに、今日を生きるすべての人々の

不安のあらわれであるといえないだろうか。私はこの不安があるからこそ、ひらかれた未来を夢みざるをえないのである。この夢を持続させていく以外に、この私にどんな希望があるだろう。

この国には、朝鮮人と日本人の間に生れた子供が、すでに十万人の単位をもって数えるほどになっている。この子供たちの存在は、閉ざされた国家主義の枠内にしほりこまれるなら、まっ二つになってしまおうだろう。私は、そのことを考えると、恐怖をおぼえないわけにいかない。この子供たちがまっ二つになってしまおうということは、すべての人間が、画一化の枠に閉じこめられてしまったということである。状況は、きわめて複雑に入り組んでいる。それだけに、画一的な考え方が受け入れられやすいのであるが、果してそれでいいのだろうか。いま一度、すべてを囚われのない目で見直していくことが必要ではないだろうか。

私は、朝鮮人がその体で生きている実に多様なあり方には、未来を切りひらいていける豊かな可能性を見つけたことができると思うのである。私の場合でいうなら、私はたと

え完全な朝鮮人にはなれないにしても、すこしずつ朝鮮人性を強める方向から生れてくるように思える。だが、私はそれが、すでに日本人になっている人々を、袋小路に追いつめる方向にならないよう努めたいと思うのである。それは、その人々が朝鮮への理解を深めていく方向と交わる方向へとすすめられてこそ、真に実り豊かなものになるのであるだろう。多分、私のこの意見は、多くの人々には認められないだろう。この意見はいかにも弱々しいように見える。だが、私はこの方向をおして、私なりに自分の朝鮮人としての可能性を切りひらきたいのである。それは、まず、人間の生活の多様性を認めて、その朝鮮人としての独自性を、この多様性を豊かに開花させていく方向で強めることからはじまるにちがいない。

それにしても、この重い問題は、将来どう解かれていくであろう。私はいま、この問題を、走り書の形で書いたのだが、これはこのような走り書では決して捉えきれないといえるだろう。私はこれからの仕事をとおして、今後この問題をもっと深く考えていきたいと思う。